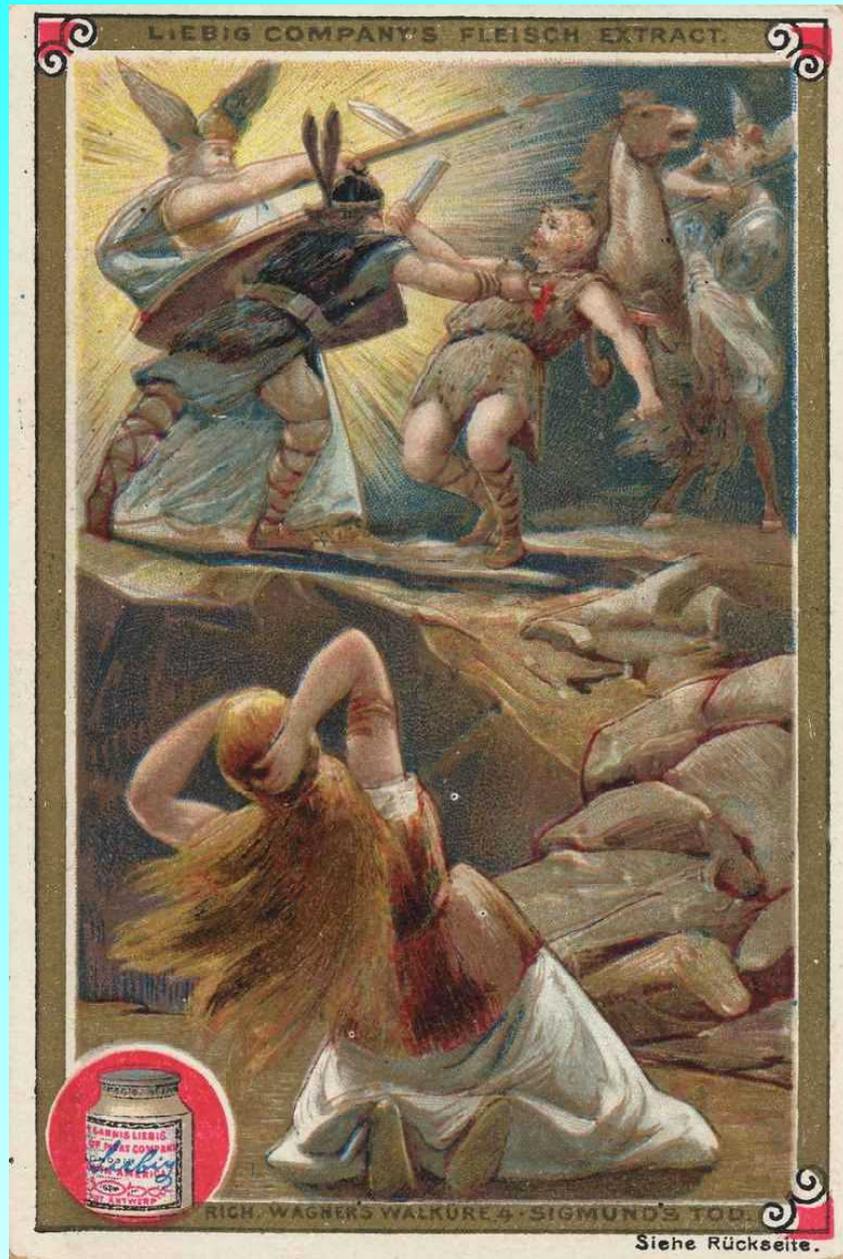


《ワルキューレ》には謎が多すぎます

「平和」と「正義」は 違うもの

2023/08/05



貴重な戦争体験

「戦争や被爆の体験がないから、平和を願う核心になる実感がない世代がいるが」と長崎で被爆した小説家の林京子さんがいうと、「体験しなければ分からぬほどお前は馬鹿か」

と原爆の凶丸木美術館の丸木俊さんが、相手をバカ呼ばわりして怒って答えました。本当に怒っていたのです。でも、丸木さん、それは無理です。戦争や被爆体験は、全ての想像を絶するからです。だが、今回のロシア×ウクライナ戦争の映像で、現世代の者たちも体験することが出来ました。幸せなことです。(皮肉)

「戦争」の反対語は、「平和」ですか？

ワーグナーの楽劇《ニーベルングの指環》は、最後が「神々の黄昏＝滅亡」で終わる「戦争オペラ」です。「善と悪」との戦いです。でも、「悪と悪」との戦いのようでもあります。そんな《指環》を観ながらでも、わたしたちはみんな、今回のこの「戦争」が終わって「平和」が訪れることを願っています。ただ、戦争が終わって、終戦を迎えて、世界に平安と安全の日々がもどったとして、この戦いのない状態を「平和」というならば、負けた側にも、平和が訪れたこととなります。でも、それで喜んでいいのでしょうか？ それが、強国による不当で不正な侵略戦争であれば、戦争が終わったとしても、強国によって占領された国や島や地域の人たちにとっては、正義は回復されないままで、真の「平和」の元に置かれているとは限りません。そこには「正義」は失われ、もはやどこにも「正義」は残っていないからです。負けた側には敗者だけの社会が残り、きっと、勝者によって虐げられ、不当に差別される生活がつづくことになるでしょう。それを、「平和」というのは変です。「平和」がそのまま、「正義」であるとは限らないからです。敗者には、「平和」はあっても、「正義」はないのです。戦争に負けたら、戦闘中のように、日々、生命を危険を曝さなくて良くなったものの、負けた敗戦の国民の側には、自由で幸せで健康な状態、すなわち、「平和」で「平安」な生活を守るだけの人権は残されているという補償はないからです。

「平和」よりも、「正義」です。

最初から、戦争には「正義」はありません。弱肉強食に正義がないのと同じです。戦争は、強い者が弱い者をいじめることから始まります。神々の王ヴォータンは、なまじの「平和」よりも、永遠の「正義」を重んじています。ヴォータンは、正義の士です。しかし、その正義の使徒で、全世界に君臨する神々の王ヴォータンですが、最近では、やることなすこと失敗つづきで、神々の座を追い出されるかも知れないと恐れているのです。妻のフリッカには反旗を翻され、最愛の娘のブリュンヒルデには裏切られ、頼りにしていた勇者のジークムントを自ら殺さざるを得ず、地下の世界に住むニーベルング族の王アルベリヒには全世界の王の座を脅かされ、巨人族のファフナーには世界を征服する指環を召し上げられ、下等な神である火の神ローグにはバカにされ、知恵と運命の女神で愛人のエルダには袖にされ、あれやこれや、良いところは一つもありません。四面楚歌どころか八方破れの破れかぶれの状態です。もうこの世には、ヴォータンに味方する「正義」はないのでしょうか。

そんなヴォータンですが、指環を奪還(だっかん)するためにいろいろ策を施します。そのために、唯一、頼りになるのは、ジークフリートです。ジークフリートは、ジークムントとジークリンデの間に出来た子供で、ヴォータンにとっては孫に当たります。でも、不思議なことにこのジークフリートについては、ヴォータンにも、これといった勝算があって作ったわけではありませんでした。そもそも、ヴォータンにとって、ジークムントさえいれば、どうしてジークフリートが必要であったのかもよく分からないのです。

竜退治のための霊剣ノートゥング

ヴォータンにとって当面の問題は、まず、指環の奪還です。巨人族のファフナーが巨大な竜になって指環をまもっているのです。指環を取りもどすにはファフナーを殺さなければなりません。でも、身体中が鋼鉄の鱗で覆われていて普通の刀では心臓を突き通せません。それに、口からは火炎を吐き、尻尾はよく動き、跳ね飛ばされたらどんな勇者でもガラス細工の人形のように身体は粉々に砕け散ってしまいます。この竜を退治するには、勇敢な

男と不滅の剣が必要です。それで、人間の女に勇者ジークムントを生まれ、自分で育てて戦い方を教え、鋼鉄の鱗を貫く霊剣ノートゥングをわたすことにしました。でも、フリッカに言い込められてこのジークムント作戦は終わらせなければならなくなりました。それで、ジークムントを殺し、自分が魔力を憑依(ひょうい:宿らせた)した霊剣ノートゥングの霊性も、自らの槍で真っ二つに折ってその威力を取り除かなければなりません。ヴォータン自らが、ジークムントを殺し、ノートゥングの霊性を消したのです。でも、竜から指環を奪い取るには、このノートゥングとその霊性が必要です。ヴォータンは、いえ、ワーグナーは、一体なにを考えているのでしょうか？

ワーグナーの手落ち

そこで、ヴォータンとワーグナーは、ジークムントは殺したものの、ノートゥングとその霊性はまた、復活させます。いつ、どうやって復活させたのかは、よく分かりません。復活したのが確かなのは、ジークフリートが竜になった巨人ファフナーの心臓をノートゥングで貫(つらぬ)いて殺したからです。でも、ノートゥングに霊性もどった説明が、物語の中では、一切ありません。二つに折れたノートゥングを一本の剣に鍛えあげたのはジークフリートです。ミーメが、二つに折れた剣をつなぎ合わせようとして、折れたところを他の金属でくっつけて繋ごうとしても繋がりません。ジークフリートは、折れた二本の剣をヤスリで削って鉄の粉末にして、それを溶かして型に入れて固めて鍛え直しました。

そのときにジークフリートは元に戻ったノートゥングを高々と頭上に振りかざしていいますー

ノートゥング！ノートゥング！ 誰もがうらやむ剣よ！ 今再びお前は、つかに戻った。真っ二つになったお前を、おれは一つに戻してやった。もうお前は、二度と砕け散ることはない。父さんが死んだときに砕いた鋼を、息子のおれが、新たに鑄直してやったのだ。さあ、明るい輝きをきらめかせ、固く鋭い剣の切れ味を試すのだ。

(目の前で剣を振り回しながら) ノートゥング！ ノートゥング！ 誰もがうらやむ剣よ！ おれは、お前の命を再び目覚めさせたのだ。死んでバラバラの破片となっていたお前だが、今はまた、血気盛んに、気高く輝いている！ お前の輝きを、盗賊どもに見せてやれ！ 嘘つきをぶちのめし、悪者を倒せ！ さあ、見るがいい、鍛冶屋のミーメ！

(ジークフリートは剣を振り上げて) ジークフリートの剣の切れ味を！

ジークフリートが鉄床に切りかかると、鉄床は上から下まで真っ二つに割れ、バキッと大きな音を立てて倒れる。それに驚いて、有頂天のあまり椅子にもたれていたミーメは、椅子ごと倒れてしまう。ジークフリートは、喜びの声を上げて、剣を高々と振り上げる。幕が下りる。

これで、二つに折れたノートゥングは見事に復活して、元の本物の剣になりました。ノートゥングは生き返ったのです。でも、再生されたノートゥングにこの一番肝心の霊性もどったかどうかは分かりません。ヴォータンが承認していないからです。ヴォータンが登場して、ジークフリートが鍛え直した剣に霊性を吹き込んだ場面がないからです。これがないと、単に腕の良い鍛冶屋が折れた中古の剣を元の姿に戻しただけに過ぎません。これも、《ワルキューレ》の謎、いえ、ワーグナーの手落ちの一つです。

祖父と孫の出会い

でもワーグナーは、そのことについて、忘れていたわけでもなさそうです。《指環》の第3部の《ジークフリート》でのお話で、言い訳らしいことがでてきます。ジークフリートは、竜をやっつけた後で、ブリュンヒルデを求めて火炎の岩場に出かけます。途中で、さ

すらい人であるヴォータンに出会います。ヴォータンは、ジークフリートが手に持っているノートゥングについて訊ねます。

ジークフリートは答えます —

「わたしが破片を元に鍛えて、この剣を作ったのだ」
「では、もともとその剣の破片はだれが作ったのだ？」
「それは知らない。だが、その破片で新しくわたしはこの剣を鍛え直したのだ」
「わしもそう思う」

ヴォータンはノートゥングに靈性をもどったことを認めます。ここで、ヴォータンは、あいまいな言い方ながら、ここに到ってノートゥングの靈性を認めたのです。ジークフリートは、行く手を阻むヴォータンの槍をノートゥングで折ってしまいます。ヴォータンの槍が、今度は真二つに折れてしまいました。ノートゥングは盤石の槍に勝ったのです。

でも、折角、ノートゥングに靈性をもどったのに、肝心のところで役に立ちません。ハーゲンが狩りにかこつけて、自分の槍でジークフリートの背中の急所を刺して殺そうとした時に、靈劍ノートゥングはジークフリートを守ろうともしなかったのです。優れた演出家なら、ジークフリートを刺す前に、ノートゥングをそっと岩陰にでも隠す演技をハーゲンにさせたことでしょう。

ブリュンヒルデの神性剥奪

靈性と言えば、ヴォータンの怒りをかったブリュンヒルデは、神としての神性をヴォータンによって剥奪されます。そして、無防備のまま、街道の真ん中に捨てられる運命にありました。ヴォータンを裏切ったことに対する罰です。通りがかりの男のものになるのです。それが、乞食であれ、異国の旅人であれ、ブリュンヒルデには、もう、防ぐ術はありません。ブリュンヒルデは、ヴォータンに懇願します — 「せめて私を、激しい炎で守って下さい。その炎を飛び越えてくるだけの勇気のある男のものにしてください」。それが、英雄ジークフリートでした。

愛馬グラナーネの靈性剥奪

もう一つ、靈性を持ったものがあります。それは、ブリュンヒルデの愛馬グラナーネです。ブリュンヒルデがヴォータンによって神性を剥奪された時に、このグラナーネも靈性を剥奪されました。そのことは、《指環》の最終夜の《神々の黄昏》で、ブリュンヒルデが、ラインの旅に出かけるジークフリートに説明します — 「この馬は私と共に力強い特質は失われました。勇敢に空を翔ぶことはもうできません」。結局、靈性を剥奪されたノートゥングも、グラナーネも、ブリュンヒルデも、ジークフリートの最期の危機の時には、彼を助けることができなかつたのです。ただし、《神々の黄昏》の最期で、ブリュンヒルデがグラナーネに跨がって燃えさかるジークフリートの火葬台に飛び込みます。このときには、ブリュンヒルデとグラナーネは空を飛んだのです。突然、この人と馬の二つに神性と靈性が甦ったのは不思議です。いい加減と言えば、いい加減です。

神々の黄昏

結局、神々には「平和」は訪れず、ジークムントも、ジークリンデも、ジークフリートも、ブリュンヒルデも、名馬グラナーネも、悪漢ハーゲンも、死にました。「悪」もなくなりましたが、「正義」もないままです。ヴォータンは、燃え盛るワルハラ城の玉座に座ったまま、動こうとしませんでした。結局、ワルハラ城は、燃えてなくなりました。運命を語り、運命を操る三人の巫女ノルンの綱も切れてしまいました。それで、ヴォータンはどうなったのか、だれも知りません。 あっ、ノートゥングはどうなったのでしょうか？

ジークフリートの死



ここに、一枚の《神々の黄昏》の絵があります。ジークフリートの死の場面を描いたものです。たくさんの薪が積まれた火葬台の上に横たわるジークフリートの遺体に、こちら側と向こう側から、二人の勇者によって、いままさに、火が点けられようとしています。立派な風格の絵です。火葬台の中央に横たわっているのがジークフリートです。その上に覆い被(かぶ)さっているのはブリュンヒルデです。子供が一人、上向きになってジークフリートに被さっています。これは、二人の間にできた子供でしょうか？ 子供がいるという話は聞いたことはありません。それとも、天使か、妖精でしょうか？ 子供も、一緒に火葬になるのでしょうか？ 中央の後ろで立っているホームラン兜(かぶと)を被った勇者はヴォータンでしょうか？ 右腕にすがって泣いている女はワルキューレの一人でしょうか？ あとの7人の仲間はどうしたのでしょうか？ いえいえ、ジークフリートが火葬になるときは、ヴォータンはワルハラ城の大広間で騎士たちに囲まれて玉座に座ったままで、お城が燃えるのを待っているのです。そういえば、この騎士の両目とも開いていません。ヴォータンとワルキューレ娘ではありません。そうするとこの立派な騎士はグンターで、寄りかかって泣いている女は妹のグートルーネだということになります。いえいえ、グンターはすでに、ハーゲンと指環を争って彼によって殺されていますので、グンターとグートルーネでもありません。結局、この騎士と女はだれなのか分かりません。では、肝心のジークフリートを槍で殺した悪漢ハーゲンはどこにいますのでしょうか？ 画面の右端、ジークフリートの頭の上に立っている騎士がそのように思われます。いかにも神妙そうにしているところが怪しいです。でも、はっきりとはわかりません。

そういえば、この絵は、結局、オペラにはいつもある「カーテンコール」の場だと考えていいでしょう。アンサンブル・オペラの終幕は、劇に登場してきた人物全員が舞台に登ってお客さまに挨拶するのです。時には、死んだ者たちや殺された者たち、この《指環》でいえば、アルベリヒとミーメの兄弟、巨人の兄のファゾルトと竜のファフナーたちもいて

構わないのです。また、ここにいないはずのヴォータンも、グンターも、グートルーネも、ラインの三人の乙女たちも、知の女神エルダも、三人のノルンがいてもいいのです。記念写真でもある「カーテン・コール」ですから、構いません。さすがに指揮者と演出家にはご遠慮願いましょう。めでたし、めでたしです。いつまで見てもあきません。いい絵です。

あっ、指環はどこにあるのでしょうか？ ジークフリートの左手に嵌まっているのが見えます。 完璧です。

【2023/08/05 都築正道】

